

1/22 エステル記 4章 4-17節「もしかすると、このような時のためかも」

小池 宏明 牧師

バビロン時代からペルシア時代に代わり、捕虜として連れて来られた民は、故郷に帰ることが許されるようになった。ところが、帰らない人々もいた。すでに、生活の基盤が出来て、世代も代わって、そのまま残ったユダヤ人たちもいた。そのような人々の生活や信仰を伝えるのが、このエステル記である。

* 試練が返って、信仰の飛躍に

ペルシアの王クセルクセスの第三年(BC480)、ユダヤ人モルデカイの養女エステルが王妃に選ばれた。そもそも、モルデカイとエステルは、なぜユダヤ人であることを伏せて王妃の候補として手を上げたのか、明記されていない。ペルシアでの生活が長くなるにつれて、主なる神様への信仰が衰退していったのかもしれない。

モルデカイやエステルが、前回のダニエルのように、「偶像礼拝を避けて、日に何度も真の神様に祈っていた」とは記されていない。それどころか、このエステル記には、主なる神様のお名前が一度も出ていない。異教の(偶像に囲まれた)地であって、まるでイスラエルの神、主なる神様がおられないような日常生活が当たり前ようになっていたことを示しているかもしれない。しかし、主なる神様は、異教の地ペルシアに留まったご自分の民の信仰が弱らないように、試練を与えられた。それが王の最側近ハマンの陰謀によるユダヤ人虐殺命令だ。モルデカイとエステルをはじめすべてのユダヤ人は、イスラエルの神、主なる神様に立ち返って、必死に断食祈禱をささげた。(次回に続く。)

* 異教世界に生きるキリスト者として

私たちも異教世界で生きるキリスト者である。この国で生きてると眼に見えない偶像礼拝の圧迫を感じることも多々あるだろう。あるいはそれに妥協してしまう自分自身の弱さに直面することもあるだろう。しかし、主なる神様は、大きな試練を与えてまでも、主なる神様の許に立ち返らせようと力強く導いておられるのではないだろうか。この地で、おかれた場所で、主が与えておられる使命に生きよう。困難な時こそ、労苦する時こそ、私たちは立ち止まって、主なる神様を、救い主イエス様を見上げて、その意味を求めてようではないか！主は必ずや、あなたを主イエス様の証し人として用いようとしておられる。「私がここに置かれているのは、このような時のためかもしれない」と示される時が一人ひとりにある。